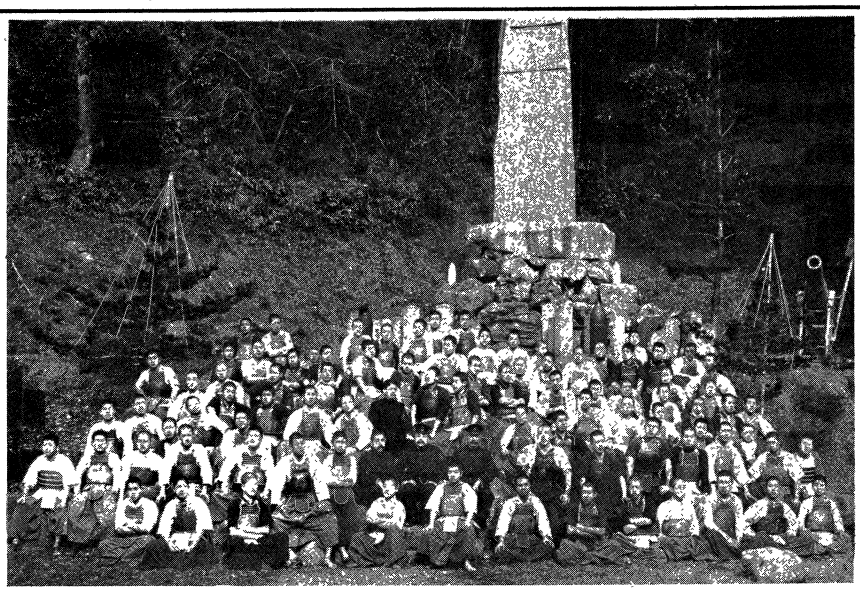


旧本多町校舎時代の厳想碑（大正15年）

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211

山本外吉
（泉丘初代校長 現金沢経済大学長）

〝一泉〟に一筆をとの依頼状が舞い込んできた。物を書くのが億劫なこの頃ではあるが一泉同窓会からとあっては、お断りするのは非礼であろう。ジョンソン旋風の余波を受けて泉丘へ転補されたのは、私には寝耳に水であった。これは大変というのが偽らざる実感で、身心ともに困憊していた私には、泉野は余りにも遠い道のりであった。でも縁あって、その道をとうとう十三年間も通うことになった。とかく楽しいことは忘れ易く、悔まれること、〝苦しいことのみ多かりき〟であった。犇き合う思い出の中から選ぶとすれば、矢張り一泉同窓会誕生時のこぼれ話ということになろうか。

会が正式に発足したのが三十年二月とあるから、その前年の晩秋だったかと思う一中同窓会から話し合いたいとの申し出がもたらされたのは、席は仙宝閣で出席は当時の会長で公安委員長をしておられたかと思う外科の田中清次さん、その後会長として長いお付合いをして頂くことになった英安吉さん、それに剣道の吉野勝太郎先生―お三方とも故人になられて淋しいことだが―外に四井謙次さんが同席され、こちらは私一人で錚々たる先輩を前にして、圧倒される感がなくもなかった。勿論、話題は同窓会合併の件であった。学制改革で後継ぎの後輩を失った同窓の淋しさは、私にも痛いほど分かるのであったが私一人で引き受けられることでなく、ご不満だったと思うが即答を避け引き下ったのである。今の人には理解し悪いと思うが、当時は米軍の占領下で、日本人の心まで改造するのが彼等の意図であり、過去との断絶が世間一般の合言葉にもなっていた。

仮入学式に柴野知事が臨場して「一中は自分の母校だが、泉丘は新らしい歴史を作る学校で一中の延長ではない」と力説されたのが今だに耳に残っている。またあの厳霜碑を幽囚の大地から堀り出し再建するにも県は関知せず同窓会が敷地の借用願を学校側に呈出するという手続きを踏まねばならない時期であった。

仙宝閣での会見後学校側では評議員会を開いて意見を聞いたが全員が合併に賛成で異議がなかった。又在校生たちが部の先輩として一中卒業生より援助を受けているという既成事実もあり同窓会の合併が一番自然な成行きだと断定された。残るは若い泉丘同窓会員の同意を得ることであり学校で役員会を開いて賛成を求めたが思わぬ反対に遭遇した。彼等には戦争中の暗い思い出があり大人一般への不信感もあったろう。私共は合併の利害得失を説いた。伝統の重みや意義についても論じた。論議は延々夜半に及んだ、でも最後に彼等は譲歩してくれた。こちらの粘りに根負けしたので気の毒でもあった。今は記憶もおぼろな遠い昔話で一泉同窓会と相携えての学校のその後の大きな飛躍が総てを懐しい思い出に変えたのである。

「一泉」第二号によせて

摑み植えの銀杏

垣田生知
（一中四十七回卒）

校庭に銀杏の木のある学校は珍らしくありません。でも本校の運動場に立って見廻すと、図書館の前庭にある五本と、運動部部室の前に並んだ四本の銀杏はいずれも根本の所で三ないしは五本に幹分かれした風変りな銀杏であることに気づくでしょう。

昭和十四年、私達が本多町の旧一中校舎からこの校舎（当時の新校舎）に移転してから二年目の秋、卒業を翌春に控えた私達五年生は、卒業記念樹として各自が一本づつ何がしかの木を植えるよう学校側から要望されていました。ある晴れた日曜日、当時仲のよかったK君と共に木を植えに行こうと家を出ました。途中犀川大橋の下手にあった植木屋さんに寄って、私は高さ五十センチほどの杉の苗木を一本、彼は二十センチほどの割箸みたいな銀杏の苗木五十本を買いました。五十本も買ったのはそれが苗箱に一まとめになっておりバラ売りはできないと言われたからにすぎません。共に金一円を払ったことを覚えています。

さて学校について、校舎北側の非常階段近くの記念樹仮り植え場に、私は杉の木を植え、ものぐさな彼は五十本の銀杏を一本づつ植える手間をはぶいて、五本づつの十束にわけて摑み植えをしました。

昭和十五年春私達は一中を卒業し、私はその後昭和二十三年夏から母校の教壇に立つことになりました。七年の歳月の間に記念樹はそれぞれ校庭のふさわしい場所に移植され、彼の束ね植えの銀杏は旧柔、剣道場、銃器庫にそった場所にきちんと十組、高さも人の背丈を越えて青葉を繁らせていました。私はそれから更に二十三年の長期にわたって、一高、泉丘と校名は変っても同じ校舎で教鞭をとる幸運に恵まれましたが、その間、図書館の新設に当って前庭を飾る木としてこの銀杏五組が選ばれ、残りも後年運動部部室の建築と共にその前に移し植えられました。

そのK君も今から十年ほど前病没しました。

しかし彼の遺した束ね植えの銀杏群は、老朽したこの校舎が取りこわされ四年後には再建される新校舎のキャンパスをも飾りつづけることでしょう。在りし日の掌の温みをそれぞれの木肌にとどめて。

彼は幸せ者かもしれません。私の植えた杉の木はどこでどうなったか未だに不明なのですから。

（泉丘高校教頭）

通信制課程の現況

中本文雄

戦後三十年有余、激動する社会の中にあって、泉丘高校通信制課程は、今日まで勤労青少年にとっての中心的な教育機関として、その使命を十分に果してきた。今こゝに歴史を顧りみると、昭和二十三年二月十日に県立金沢第一中学校に、通信制教育高等部を付設し翌年二月二十七日に開校式を行う。三十三年三月十日、第一回卒業式を行い以来本年度第二十三回までの卒業生は、一〇七三名に達し、一泉同窓会の一員として活躍している。

三十八年四月十四日、NHK学園高等学校協力校となり現在一三四名の卒業生を出している。尚一昨年より一部科目履修生を募集し毎年二十余名の単位修得者が送り出されている。通信教育は、自らが学びたいから、自ら求め、そして自分のものにするものであり、本当の意味の教育を求めている制度である。何時でも、どこでも、誰れでも、学べる教育こそ真の教育であり、通信制の特色でもある。

本県における全日制への進学率が、九十七、四パーセントに達している中で、高等学校が国民の大多数の子弟を教育する国民的教育機関となった現在、通信制教育も様々な課題を抱えるに至り、大きな変革を迫られている。通信制教育のおかれている位置や、姿をとらえ、通信制教育の基本を踏まえつゝ、生涯教育の観点から後期中等教育全体の中でその在り方を考え直さねばならないように思われる。

高度終済成長が生みだしたといわれる人間疎外のひずみの反省と、人間性の回復が強く望まれている中で通信制課程の教育が、生徒一人一人の個性の伸張を図り、豊かな人間形成を目指して着実に歩を進めることが、明日への教育のためぜひ必要なことである。

今後、同窓生諸兄のご協力とご指導を切にお願いし、通信制の現況をお知らせいたします。

（泉丘高校通信課教頭）

同窓の随想

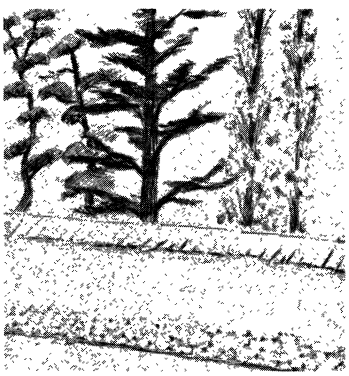
金沢一中の思い出

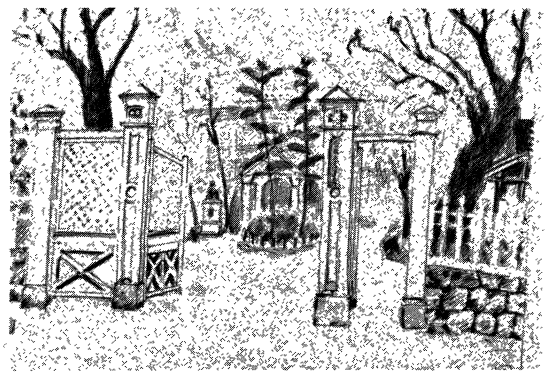
清水与七郎（一中九回卒）

私は今年九十五才。金沢一中の第九回（明治三十五年）の卒業生であります。一泉同窓会の名簿によると、卒業生六十五名内、死亡五十四名、不詳六名、生存者五名となって居ります。ところが私の知るところでは生存者五名の中、得能佳吉君は東大を出られ先年亡くなられました。

さて私は一中に入学したのは明治三十年で当時の高等小学校二年（現在の小学校六年）終了年令十三才でありました。私の郷里は富山県福岡町で、当時富山県には中学校は富山市に一校あるだけでしたから、高岡市以西の青年は現在のような越境問題などがありませんので、多くは金沢の中学に入学しました。福岡から金沢までは十里ありまして、まだ汽車のない頃で一日がかりで歩いて通学しました。私は年少でしたから、津幡まで歩きあとは、人力車で金沢の浅野川大橋まで行きました。賃金は九銭でした。私が入学しました頃は、石川尋常中学校という校名で、校舎は安江町にあった本願寺の教校を借りていたように覚えています。外に尾山神社の附近に分校がありました。私が二年になった時、金沢二中が出来て生徒が一中と二中に分れ私は一中に残り本多町に行くことになりましたが、仮校舎と違い運動場が広くそこで軍事教練や野球をやり、球が外野に飛んだフライを捕ると大喝采でした。私は寄宿舎に入らず長町に下宿しましたが、その頃で下宿代は三食付一日九銭、一ヶ月二円七十銭でした。一中の授業料は一年生が一ヶ月三十銭、二年生以上は十銭上りで、五年生が七十銭、成績のよい者は特待生として無料でありました。生徒の服装は和装まちまちでしたが、三年生の頃小倉地になり一着三円位でした。一中の生徒は勿論大半が石川県人でありましたが、前にも申しましたように当時は越境問題がなかったので富山県人も多数居たようです。富山県人は越中なまりで話すので〝越中さ〟とひやかされるので一生懸命金沢言葉を習いました。私は今でも金沢人と間違えられております。

旧本多町一中校、正面と土塀のスケッチ





井口政雄（一中大正十五年卒）

卒業六十七年に際し

谷恵吉郎（一中二十回卒）

二十年目がクラス会の一つの大きな節目となるように思われる。大正二年に卒業した私共が迎えた、第一の節目に当る頃には全員の殆んどが健在で、夫々の業務に精励、張切りの絶頂にあり、東京、関西、地元と各地方で開かれるクラス会は何れも活気横溢したものであった。第二十回の自分達はその時丁度卒業生全体の真中にあり、クラス会の名称を中心会と呼ぶことにするとか、したとかいう話もある位意気軒昂たるものがあった。

その後大東亜戦争の戦中戦後の、苦難を乗り越えて、第二の節目となると、会員数は稍減少したが、分別盛りの者達が集まって、会合の構想も漸次豪勢なものになった。ところが第三の節目、卒業後六十年となると、現存者はめっきり減少し、物故者の追悼談などで人生の黄昏時を感じるようになるのは已むを得ないことであろう。

一泉同窓会の名簿を見て、山登りにたとえると、私共は一中だけを考

えて、九合目にあると思う。まして泉丘という一中の二倍半もある裾野の拡がりが出来たことを知り、誠に心強く思う。

更に長老先輩の健在は私共を限りなく勇気付けるものである。殊に上位三名の先輩とは浅からぬ因縁をもつ私には一しお感激深い。最長老の茶谷保三郎先輩が安宅産業の専務であられた時代、四十五年も前のこと、十五年戦争の戦火が燃え上ろうとするときで、また東京音頭が流行し出したときであった、我々海軍技術研究所に勤務していた金沢一中出身の後輩数名を柳橋の柳光亭に招いて時局柄大いに激励されたことを懐しく思い出す。長寿第二位の清水与七郎先輩は東大電気工学科の先輩でもあり、戦前戦中戦後を通じ、業務上緊密な交渉あり、その間には忘れ得ない想い出の数々がある。第三位の吉田一郎先輩は住居が近く先日も訪問して、懐旧談に花を咲かせたのである。

現代は何事によらず国際的となり、過去に拘泥せず前進のみという趨勢にあるかも知れないが、同級、同窓、同郷、同僚、同業、同好等々あらゆる連繋が人生を豊にする要素である。特に純真な青少年時代の交りは珠玉の貴さに値する。この意味において我が一泉同窓会の隆昌を祈り、同事務局諸氏の労を深謝して止みません。

草花を墨で写した拓画

宮地勝彦（大正三年卒）

拓画といっても一般にはなじみのない言葉でご存知ないことでしょう。私が勝手にそう名付けているからです。それは草花に墨を吹きつけ、色紙などに写して彩色を施したものです。いわば、植物版の魚拓といったところ。絵心のない人にも簡単に墨絵のようなものが作れる。

私は子供の頃から自然を友として過した。それは病弱のせいもあり中学に入ってからは柔道、登山、魚釣り、旅行など盛んにやった。

私は当時から狭い日本を離れ、海外に雄飛したいと思い、それには農業を学ぶのがよいだろうと東大の農学部農学実科に入学した。大正七年三菱合資会社に入社以来、中国北部での綿花改良事業、ブラジルでの農園経営、スマトラでのオイルパーム園の経営など植物と縁が深かった。人生の大半を海外で過してきた私の楽しみは油絵、水彩画、彫刻などの趣味だった。戦後この趣味が私の無聊を慰めてくれた。この二十年ほどは植物のレリーフを作って、これを私は「拓彫」と名付けた。これをもっと簡単に出来るものはないだろうか、と考えて思いついたのが拓画というわけだ。植物そのものを〝印刷〟するだけで済む。レリーフとは比較にならぬ程手軽にできる。まづ草花に濃淡なく一様に墨を噴霧器で吹きつける。次に墨をつけた草花に紙を当て、ローラーをかける。この力のかけ具合が相当の練習を要する。そして墨が乾いたところで彩色に移る。こうして出来上った作品は写真とも絵画とも異なる独特の味わいを持っている。素材は路傍の野草で十分である。四季の移り変りを作品としてみるのもまた楽しいものである。拓画作りは結構忙がしい、この私の趣味を知った友人のすゝめで展覧会を開いたのが縁でこの夏「日本拓画研究会」を設立し通信教育を始めた。趣味は人生さばくのオアシスだと私はつねづね言っている。

鵜は悲し霽れやらぬ空能登の海

英勝雄（昭和九年卒）

口ずさむ春白山の峯の雪
思い出や秋犀川の渕の水
闊歩せよ一泉健児の意気高し
思ふまゝ華城春望独吟す（舞台にて）
かすみけるいつか帰燕の古墳塚
児のバイ〳〵親の笑顔や手で答う
紅葉狩さらりとあげて独り悦（観世）

野市他作（大正十年卒）

不世出の故大鋸彦太郎翁

米沢喜六（一中二十五回卒）

一中から数多くの著名な人が輩出されたがこゝに招介する大鋸彦太郎氏程異例の人物は今までのところ現われて居ない。

大鋸彦太郎は私と同じ大正七年25回の卒業である。家は豆腐を業とし放課後箱をぶら下げて売り歩いた青年であった。在校中日置謙先生に師事して郷土史に深い関心と興味を覚えたのであった。卒業後家業を弟に譲ってから暫く表具屋をはじめた、襖の下張りになっている古文書が見たい為であった。妻、よりさんを迎えてから一層と関心が高まった。よしこれから棄てられんとしている貴重な文献を集めようと決心した年二十四才であった。彼は市内の屑屋と反古屋を廻り始めることにした。朝から夕方までの繰返しが日課であった。

彼は紙の質で年代を知る眼識を有していた。反古屋の庭先に集められた品の内から郷土に関係あると思われるものを片っぱしから買取った。そして夜は其の区分整理に専念した。**続ける事二十五年時局は彼を召集戦**地へ将校として出征させた。其時彼は私に「気にかかるは妻でなく集めた古文書書籍である」と述懐していた。其時すでに古文書数知れず本は三万を越えていた筈であった。復員後又其の日課がはじまった。雨の日も風の日も駈け廻った。棄てられんとした地図、チラシ、本、衣服、古文書をかき集め蔵に入れ、座敷の空間にぎっしり詰め込んだ、彼は集めた品を売る意志は毛頭なかった、ただ同じ物が二つある場合だけ希望者に安い値で分譲した位であった。この貴重な資料は郷土史家学者間の研究に大きな役目を果しつづけた。博士号を取った学者で彼の恩恵を受けた人が数多くあった。東京国立劇場から金沢の過去の演劇の取材に来た人から資料提供を頼まれた大鋸氏は「よし判った」と明治の始めからの番付を約一千枚出したのには驚天して全国でも金沢丈であると感激した。大鋸氏は昭和五十五年三月八十二才で他界して六十年間の屑屋廻りに終りを告げた。

古文書積んで山の如く、古書四万冊以上、江戸時代からの衣服の数々は今、県の手で数年の計画で整理中である。いづれ大鋸文庫として後世に伝え郷土史に貢献する事であろう、この偉大なる功積はいつの世までも語り草となるに違いない。そして最後まで助け見守った妻よりさんの功労も特筆すべきである。

彼の歩んだ六十年間に天文版論語を発見、捨てられんとした春日懐紙を後の世に残した事は有名な話しである。心から冥福を祈り続けたいと思う。

高校相撲

吉田直茂（一中三十二回卒）

毎年五月、金石海岸で行われた中等高校相撲大会で、声を嗄して応援歌を絶叫した青春の想出は今も懐しい。その金石海浜も海岸浸蝕で狭隘となり、何時しか相撲が催されなくなった。

昭和三十年秋、私が石川県土木部長として金沢に戻った頃は、全国高校相撲大会となり、県営兼六園球場（今は厚生年金会館）で行れる慣行であった。然し球場で相撲大会が催されると、年間日程逐行上その他で支障が多いと野球連盟から反対申入れがあった。兼六球場の管理は土木部所管であり、この申入れを尤と認めた私は、三十一年度から相撲大会には使用させないと関係方面に通告させた。

或る日呼ばれて知事室へ行くと、田谷知事と面談しているのは、北国新聞社の石井主筆で、私とは初対面であった。「大会の歴史も伝統も知らない浮草稼業の役人が、一知半解の理窟で大会々場の変更を迫るのは甚だけしからん。抑、この行事は石川県中等高校相撲大会として金石海浜で開かれて以来……」と大変な権幕で、新聞の威力（？）を背負っての強談であった。私も開口一番「浮草稼業とはいえ、私も一中卒業生の一人だ。金石の相撲を知らずして卒業できると思うか。あの凄しい応援歌の渦巻く大会雰囲気を知ることでは、私の方が一枚上手だ」と反撃すると、相手も直ぐに判ってくれて、後は知事を交えて鼎談。所詮は専用相撲場がないスポーツ行政の貧困と結論じ、本年は従来通りとするも、来春までに専用相撲場を造るよう努力することで話が纏った。

その後金沢市の協力もあって、卯辰山公園の一隅に現在の相撲場を築設し、立行司木村庄之助（金沢出身）を招いて盛大に土俵開きをしてその完工を祝った。

五年前に横浜を引払って再び金沢に戻った私は、鈴見団地に居を定めたが、恒例の全国高校相撲大会の日は、応援歌や喚声が風に乗って聞え

ると、往時を偲び夢と去った歳月を懐しむのである。田谷知事も石井主筆も今は亡い。（五五、九、八記）

卒業五十一年目の顔と顔

金沢一中三七回会長
一泉同窓会副会長
竹田長松
（昭和五年卒）

九月末関東世話人会の尽力、熱海の大観荘（元横山大観画伯の別荘）で、全国よりはせ参じた面々、二十九名、内、杖変りに夫人同伴で二人三脚の連中が八名、半世期前の、紅顔の美少年、又、ニキビはなやかなりし豪傑連を再度分析してみたら、丸禿（一本も毛の見当らぬもの）三人、純白の好々爺が五人、半白が大部分、中に学生相手の商売で、真黒なのが僅かに二人、ほんとうに、つらにくい奴共がいる。

青森のジャスコ、土佐の高知のシンコ、東京のドンコ、金沢のヤンコ、みんな昔の古いおもかげをやどし、話がはずむごとに、本多の森、旧寄宿舎裏（番兵を立てて、タバコをふかし合った処）の思い出がよみがえってくる。

お酒の量の少い割に酔が早くまわり、調子はずれの四―五重奏の応援歌が出る。（せっかく本部の事務局からもらってきた、応援歌集も、字がこまかいとの事で、東京組の幹事諸兄が、太文字の印刷物を用意してもらって大だすかりだった。）

さすが校歌になると、多少落ちつきが出て来た。何分にも七十才近い、昔の好青年だから無理もない。

昨年の全国大会（粟津の法師）以来、一年目、末筆になったが、開会時に四名のあらたな物故者に対する冥福を祈った事は云うまでもない。

おそらく、来年は一人歩きの許可が出ず、夫人同伴の二人三脚組が倍加すると思う。

鏑木、宮沢両先生に、寄せ書きと、些少な手みやげを金沢組が託され、箱根遊覧の途につき、有意義な二日間を小田原までつづけた。

北京站での万才

荒川宏
（一中四十五回卒）

白雲愁色の風情もないまゝに、冷夏の今年は足速やに秋の訪れを迎えた。

今年の一泉同窓会も間もなく開かれる。校歌や応援歌で散会の後、余韻を残しつゝ多感な青春の思い出の一駒を甦らせて家路につく。

この一ときが私は楽しい。

昭和十五年の暮も押し詰った頃、私は翌年二月十日の兵役入隊のため、大陸に尽きぬ名残りを惜しみつゝ、その想い秘かに中国服のまゝ北京站を出立した。

会社（華北車輛）をはじめ北京恢弘塾の先輩、塾友達など大勢の人が、日の丸の旗を振って見送ってくれた。亜細亜の将来を論じ、誓合った黄民連盟の同志達も、密かに見送りの中に混っていてくれた。

やがて壮行激励の辞を頂き、列車の出発時刻が近づいた頃、人垣を掻分けて現れた一人の人物が突然、「荒川君は金沢一中時代私の教え子であります。いろいろご関係の方がおいでと思いますが、僭越ながら私に万才の音頭を取らせて頂きたいのですが、如何でしょうか。」一勢に拍手が湧き起ったことは云うまでもない。

この人こそ、当時華北政務委員会（政府）の教育特別督学官であった青地乙治先生であった。

青地先生は、私達の一年生時代に着任され、卒業後の昭和十三年六月ご退任、北京でこの要職につかれた筈であった。一中から恢弘塾へ行った同級五人が西単牌楼附近の官舎に呼ばれて、御馳走になり、はじめて白乾児酒の飲み方を手ほどきして頂いたのも青地先生であった。私達は本多が森から移って、最初の卒業生である。間もなく改築されると聞く現在の校舎に入って二、三ヶ月した頃、一中生を誹謗した新聞記事に憤慨して、校長室に押しかけ激論を闘わした相手も青地先生だった。

昨年十月末、三十九年振りに見た昔の北京站は、建物のみ残っていたが、私の耳朶にははっきりとあの時の先生の「万才」の声が聞えていた。

列車が到着する時、鳴らしてくる鈴の音とともに。

いろ〳〵な先生や友に関する回想の譜は尽きない。

しかしこんな想い出を持ち得た私は、幸福者と云わざるを得ない。

（昭五五、九、二〇記）

大先輩との出合い

川北　篤
（一中五十五回卒）

昭和四十二年十月頃だったかと思う。当時、一泉同窓会、一泉懇話会のお世話をしておられた四井先生が、突然訪ねてこられ「中川善之助先生が金沢大学学長になられ現在城内の講師寮におられるが、先日お尋ねしてこれを書いてもらったからあんたにあげる。」と云って墨痕鮮やかな「平常心是道」という書をいたゞいた。大先輩が私のためにこの書をお書きになり、そしてわざわざお届け下さったことに大いに感激し、早速学長先生に御礼の心情をしたため、お手紙をだしました。たまたま一中二十二期の御同級である吉野先生、四井先生との御会食の折、手紙のお礼に川北を呼ぼうということになり、会食に出席するよう連絡をいたゞいた訳です。そして指定された時間の数分前に浅の川畔「ごりや」えいったところ、丁度、中川先生と一緒になり部屋へ通されたが大先輩と同席のため堅くなって恐縮している私の気持を少しでもなごめようと御配意下され、当時中学一年であったお孫さんが急性虫垂炎になったときの話をされました。私も医学の話でありますから多少の応対もでき、次第に緊張感も解れた頃に、吉野先生、四井先生が次々にこられ会食が始まった訳です。これが中川先生との出合いであり、その後奥様を金沢にお寄びになり、宮一泉同窓会会長のお世話で古今亭にお住いになってからも、家族ぐるみでお付合いさせていたゞき、昭和四十三年夏には先生の軽井沢の別荘へもお伺いし、又御同級の番匠、正見、四井の諸先生方とのスキ焼コンパにも時折同席させていただいたりもしました。

その頃、私は医を志す者の指標として院歌を作りたいと思い、その作詞をお願いしたところ快よくお引受けいたゞき論語の文句に、地名の医王山、犀川等の字句をいれた、いつの時代でも適応する素晴らしい院歌を作詞していたゞきました。作曲は中川先生のお世話で、先生と御親交の深かった四高の南下軍の作曲者で、当時米寿をお迎えになられた簗瀬成一先生にお願いしていたゞき、昭和四十五年十月に院歌披露に至りました。

中川先生の金沢大学学長御在任のときは、丁度学園紛争の頃でありその御心労も大変多かったと思いますが、先生の人格と適確な対応により、他の大学ほど熾烈な紛争にならなかったのではないかと思います。そして、時々お合いしていた私にとっては、先生のお話下さるお言葉の一つ一つが人生勉強になり、私の人生で最も充実した時期であったように思います。昭和四十八年九月、御退官の時には「三折肱知為良医」（三度肘を折って良医となる事を知る）という書をいたゞき何事も経験が大事だとさとされました。昭和五十年三月二十日御逝去される一週間前に御来沢されたときも大変金沢をなつかしがられ夜おそくまで懐古談にふけりました。帰京後間もなく、突然の悲報に接し、たゞ驚きと悲しみで一杯でした。

その後御同級の吉野先生の最後のお世話もさせていたゞき、又井口、正見、綱村の諸先生も次々に他界され、四井先生も闘病生活をされております。ソウソウたるこれらの一中の大先輩の方々とお付合いをさせていたゞき私の人生において本当に有意義な一時期を過すことのできたことは、我が金沢一中を卒業し一泉同窓会の一員であるおかげと喜こんでいる次第です。

（川北病院長）

木芯乾漆で輪島塗りの技法を彫刻にもちう

二紀会　堀　義雄
（一中昭和十年卒）

金沢と文化行政

小松 曉一
（一中五七回、泉三回卒）

石川県が文化ゾーンとして兼六園周辺を新しい視点で見なおそうと計画化されていますが、すでに文化施設としては、緑の環境にふさわしい県立能楽文化会館、また、なまこ壁に武家文化の重厚さを見せる成巽閣やそれに不思議と調和する大正モダンの郷土資料別館、本多の森に目を移すと、老木や野鳥のさえずりの中に位置する本多蔵品館や市立中村記念館と、金沢らしい史的空間を形成しています。

一方中央公園の郷土資料館や近代文学館などを加えれば、金沢の知的都市核としてユニークな広がりを見せてくれます。近くは高岡中学跡地にも市立文化ホールの建設が予定されており、兼六園周辺より広坂、高岡町、金沢市立図書館へと文化ゾーンのベルトが伸び、これらの領域的広がりの立地条件は金沢を語るに貴重な都市空間となることでありましょう。

とかく、文化施設や文化事業の育成に行政はついうしろ向きになる見解が多いようですが、金沢においては、幸いにも都市近代化への積極的な要素を作りつつあるようで、住む市民のためにも魅力ある都市づくりが大いに期待されます。

伝統文化を守り、新しい文化を育むことが豊かな個性づくりの強い戦略になることは認識されつつありますが、その文化を受けつぐ若い人々の教育土壌、即ちその一つには学校環境の場が最近見なおされつつあります。誠に残念でありますが、上記の文化施設に較べると少々公立学校の環境は、企画、建築デザイン等規格いつ的な現状であるように思われます。

幸いにも、母校泉丘高校がこの度び大々的に改築されると聞いております。泉ヶ原に堂々と建設された当時をいまいちど想起され、新しい時代の流れのなかに再び堂々たる新しい校舎が展開され、多くの若人が夢を抱きながら学び育ちいく環境をつくつて戴けるよう、この際御関係者に強く御要望致す次第です。

（金沢美術工芸大学助教授）

同窓会の心

井波 豊英
（泉丘十一回卒）

私が三年生の時クラスを担任して頂いたのが故菊地茂樹先生です。先生は授業の進め方がとても御上手で、私共のようなぼんくらでも落ちこぼれを出さすことなく、無事卒業へと導びいていただきました。卒業後その徳を慕って七、八人が先生を囲みいくどか杯をかたむけ、ある時次回幹事の役が私の所に回り、一週間前先生と日時だけを確認、その後場所も決め前日先生宅へお電話したところ娘さんが出られ「父がなくなりました」との御返事、何のことやら意味が解らず二度、三度と聞き返し、なんとあの御元気だった先生が私の連絡するわずか三時間程前突然に倒れられ、そのまま息を引きとられたとは、あまりのことに茫然自失ただ驚きうろたえた自分が昨日のように思い起こされます。その後心の拠所を失った我々はそれではと全体同窓会に思いを馳せ、昨年の卒業二十周年記念同窓会を含む三回の集いを得、それ〴〵の旧交を暖め合っております。私はこの過云三度の会を通じて、その都度心に思う事が一つ有ります。

それは大勢の校友が一同に集まり全員声高らかに校歌を斉唱しているその時、感じるあの同窓会というのは何時でも何度やってもいいもんだなあ、皆本当に仲間なんだなあ、という懐かしさと出席出来た嬉しさです。私はこれからも皆出席し共に校歌を歌いたい、さあ同窓の若人よ、その日には是非愉快な顔で出席してくれたまえ。同窓会には現在の顔はいりません、昔の、高校時代の顔と心、それだけを持ちよって、爽やかに、それが同窓会の心だと私は思っています。

幸い一泉同窓会も西多先輩の非常な御努力の下、機関紙「一泉」の発行を始め、種々の諸事業が活発に行なわれ、今や素晴らしい充実をみせて来ております。私も泉第十一期生を代表して諸先輩に負けることなく今後の会の発展に少しでもお役に立てればと思っております。よろしくお仲間入りの程を。

卒業二十周年によせて

本野雅隆
（泉丘十三回卒）

私達十三回生は、昭和三十六年三月に五百二十四名卒業した。五十年十月に卒業後初めて全員の名簿を作り、全国より百二十名程が集まり同窓会を行った。当時の編集後記の一節を紹介すると、

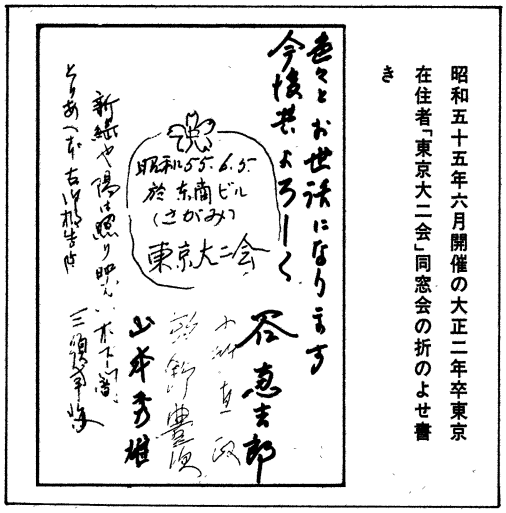
「数年前に同窓会名を「二六会」と付けたがや。その間今まで細々と過してきたがや。卒業して早十五年程になるやろ、そやさかい、一大発展をはかるため名簿を作ろうと思うてなあ、始めたがやけど、新旧の町名変更やら、核家族化やらで、大変苦労したがいや、三六年に卒業した事の意味や……」後略

今では金沢弁もすっかりテレビ語化してしまって、あまりこの様な対話は聞かれなくなったが、昔なつかしい方言でつづった一節です泉野の野は今ではすっかり変貌をとげ、区画整理がされ、高級住宅街となりましたが、往時の苦しかった、マラソンコースを愛犬と共に時折、富樫、窪あたりに散策するが全く思い出せない、というより変わり過ぎてわからないのである。お腹が減り過ぎていますぐ食べると、なんとうまいんだと夢にまでみた、あの城壁の様な有刺鉄線に囲まれた、りんごやなし畠が無いからです。どじょうの住む小川や、我もの顔のカエル達の円舞場も姿を変えてしまいました。スズメノテッポウで草笛を吹いたり、エノコログサで友の首筋をなでおどろかした思い出等……

純真であった昔を思い出し、懐かしみ感傷にひたるこのごろです。これらは私自身の弱さなのでしょうか

来年は卒業二十年目にあたります。再度大同窓会を行う予定です。お腹の出具合、頭の輝度の番付が新たに出来るのではないかと楽しみにしています。

坂野雄一　（一中五十四回卒）



昭和五十五年六月開催の大正二年卒東京在住者「東京大二会」同窓会の折のよせ書き

一中校歌

一、雲に聳ゆる白山の
高き理想を心とし
北斗の光仰ぎつつ
文の林に分け入りて
力を合せ睦み合ひ
世の荊棘を拓くべし

二、怒濤逆巻く越の海
八重の潮路の際涯なき
学びの海に船出して
左手に真理の艪を握り
右手に正義の舵執りて
進め我が伴一千人

泉丘校歌

一、見はるかす加賀野の果てに
日本海青くかぎろふ
この丘に湧き出づる泉
若人の魂を融かして
きよらかに海へとそそげ

二、永劫に学び勿絶えそ
岩のごと校舎は立てり
重畳づく医王の峰は
若人に自立のこころ
指し示し高くそびえよ

講演要旨 一泉同窓会常任委員会にて

「曲り角にたつ日本人」

山森青硯（大正十五年卒）

先日来、在金沢の両新聞（北国と北陸中日）が一様に「一中泉丘校物語」を連載して居ります。此れは非常に喜ばしき事であると同時に、益々責任の重大なるを覚えるものでございます。世間は我々に人心の喚起を促がしつゝございます。従来はまづい所論は一顧だに得ませんでしたが、今や我々同窓会員の矜持は直に迎えられて、其の良否を問わず実施さるゝ事が多うございます。是は簡単な様でございますが、前述した責任が重且大と申しましょう。

あれから（終戦から）35年経ちました。長い様で短いものでございました。此間に小波はございましたが、戦争が無く、日本が叫ぶ平和論は、戦敗国だけでなく、遠く戦勝国にもひびき世界は如何なる立場にあっても、忍び難きを忍んで来たのは事実でございました。其間世状の変化を申しますと、ソ連のアフガニスタン進攻問題、イラン国の米人人質問題、青少年の処世の観念問題。以上でございますが、右の内、戦前は無名士の国に殉ずるを誇りとしていたに反し、戦後は大死を戒しめ、有効な処世術を慫慂している様でございます。

商売人は一度は損の経験をなめぬとだめでございます。損は元金であります。幸に日本人は損益両面の経験を有し、時局に対する活眼を有するのでございます。日本人が持つ世界観と、世界が見る日本観は其時代に依り異ります。天保六年（一八三五）の末葉「亜細亜小東洋図」を繙きますと、中国領土は万里長城が北限となり、北海道は二分され、南半は松前（日本）となり、北半は蝦夷（他国）となって居ます。又カムチャツカより満州に至るを赤く塗られています（日本）源判官義経の地と附記、琉球、竹島、対島も赤色（日本）となっております。是は日本だけでない世界が認めていた地図でございました。

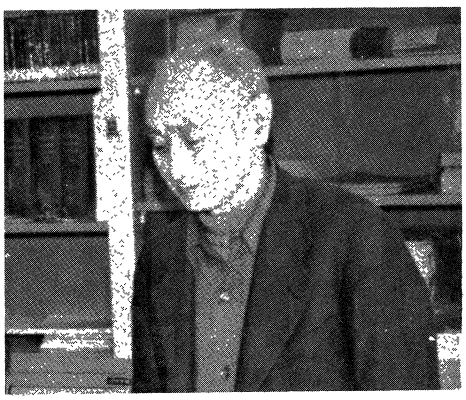
昭和20年終戦時米国は日本に軍備を固く禁止しました。唯今は反対に軍備を持てと云っています。是は非常に難問でございます。抜かない正宗なら、始から腰に差さない方がよいとの論と、否定論と錯雑して居ります。正宗を佩き乍ら不抜の人間を養成するのは難中の難と云えませう。昨今日本に是を迫られている現状でございます。世の中に「羹に懲りて膾をふく」と云う諺がございます。且てのユダヤ民族は此様にして優秀民族が世界に分取りになりました。日、米、中の近接と、ソ連との関係は次期平和論の一課題となりましょう。私は今日本人が最も学ぶべきは宮本武蔵の五輪書と云う本であると思います。生涯50余の果合いをなし、雁流島を最後として争はからりと止めた。残り半生は文物を以て生涯を終っています。米国はモンロー主義と云うものがあり、常にブレーキのかゝった進攻をやっています。（ベトナム、イラン）ソ連は自然を友とし退却により、ナポレオンもフビライも敗退して居ります。是は現時局の両極と云えましょう。

嘉納治五郎師はよく「柔能ク制レ剛」とお説下さいました。是は軍備なきもののよく大国の野望を制すると云う事でございます。（黒板に図示す）今先生が在世なら現時の柔道（重量制）を嘆かれることでしょう。（師は久田校長と同期で、泉丘校に甲南と署名の先生扁額がある。）

最近法務大臣が憲法の改変問題にふれ、センセイションを起しています。私は思います。今も石川五右衛門の哲学は生きている。五右衛門曰く「私は小さいものを盗んで火炙の刑になり、友人秀吉は大きいもの（国）を盗んで英雄となった」一層悪でも大で成功すれば善人となり「君側の姦を除く」と云う名言となる。史家は心すべきことにこそ。

私は泉丘校に招かれて二年有半同校稀覯本を読ませて頂いて居ます。全巻悉く善因善化、社会の道標となれと叫んでいます。現時の世界に有形に（イラン、ソ連、中国）無形には（思想会）大きい曲り角がございます。日本人は今其曲り角に立っています。

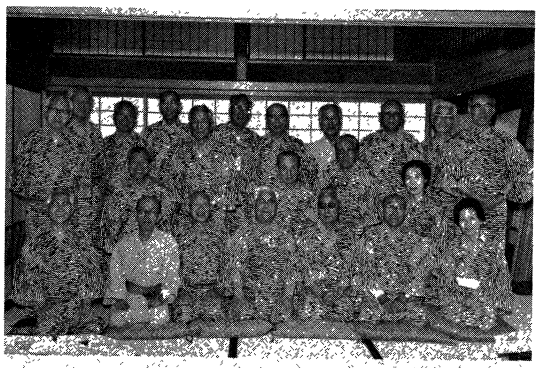
世界が刮目している日本人。其中核となる一泉同窓会の諸君よ、善化の道標と成ろうではありませんか。



同窓会の集い

◇一中三十一回生同窓会

大正十三年に卒業した31期生では近く迎える六十周年記念大会をひかえて、本年度大会を熱海温泉の起雲閣にて五月三日開催した。金沢の地元より飯倉薫、高島弥生、村山勝次郎氏等十名の会員が馳せ参じ、計二十七名が一堂に集った。同会は過ぐる一中の七十年記念大会を期に毎年行われているもので、この日も互の健康を祝し、賑かな歓談の裡に一夜を過ごした。尚又来年は神戸に於て開催することを一同にて決定し翌日散会した。

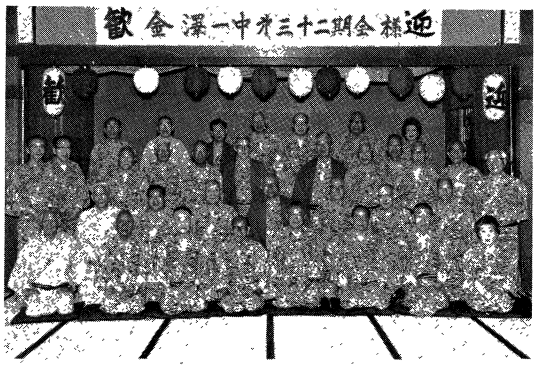


金沢一中十三年会熱海大会　昭和55年5月27日　於熱海　起雲閣

◇一中32回生熱海大会

昨年、山中温泉にて全国大会を催した大正十四年卒三十二回生は、本年は会場を熱海温泉の起雲閣にて去る五月十三日大会を行った。地元より吉田直茂氏はじめ夫人同伴にて大挙参加し総勢四十余名が顔を合わせた。

一年振りの元気な姿に一同感激し、互に健康を祝し、往年を懐かしみ杯を交した。



昭和55年5月13日　於熱海　起雲閣

◇金沢一中三十三回同窓会

大正十五年卒の一中三三会全国大会が世話人藤田誠一、松平忠三、関口勝三氏等の手で催された。会場は山中温泉「聴泉閣」で去る五月十五日旧師の稲垣忠男先生を招き三十七名が参加した。卒業以来既に五十五年互に健康を祝し和やかな内に談笑が進んだ。とくに当日、関口勝三氏の作詞になる謡曲に山森専吉氏が作曲し小鼓を川西弘見氏がうち村上進、和田光、村上外雄、田中嘉太郎、山森専吉氏が謡い一同の喝采を博した。

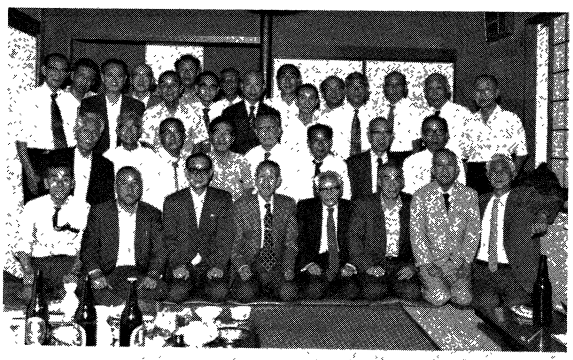
又、三三会では去る八月二十七日、東京在住の山田義孝氏の帰省を機に急拠金沢在住の会員に呼びかけ井口政雄氏が中心となり懇親会を開いた。集った会員は十五名、今後「金沢三三回」を開き機会をつくって集合、親睦を深めることを決めた。

昭和55.5.15　金沢一中三三会山中大会　於山中温泉聴泉閣

◇一中三五会同窓会

毎年続けている昭和三年卒の三五会は今年も六月二十八日、世話人木下久雄、松井順孝、大森玄衆氏等のはからいで同窓会を開いた。会場は柿木畠の「ト一」にて催され三十名が参加した。今年も、鏑木、宮沢両先生が出席され、一同感激して迎えた。大森氏の開会挨拶につゞき永らく同窓会に尽力して去る五月亡くなった藤江喜三次氏をはじめ皇昇羌、津山義文氏等、一昨年の五十周年記念大会以来、亡くなった六氏の追悼の意をこめて、その冥福を祈った。

続いて木下氏から会務の報告と共に、会員の消息等を報告した。尚この春の叙勲に輝く松井順孝氏の栄誉を一同拍手を以ってたゝえ祝宴に移った。数年振りに顔を合す会員もあ

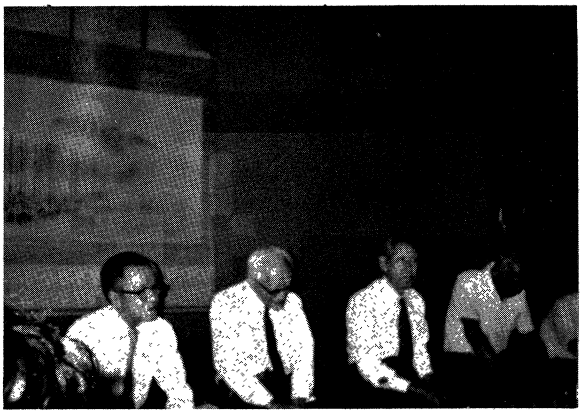


昭和55年度金沢一中三五会総会　s55. 6. 28

り、和やかな歓談の中に再会を約して散会した。

◇金沢一中36期在京同窓会

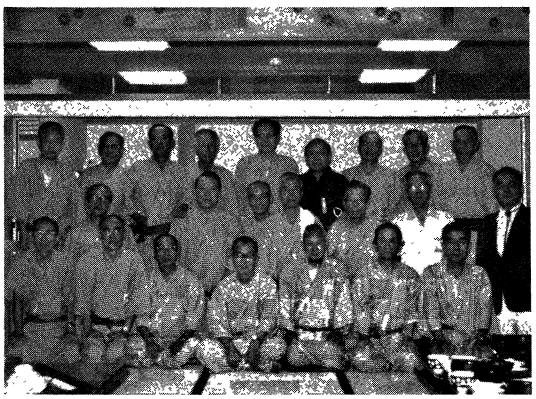
一昨年金沢にて卒業五十周年記念大会を催した。一中36期生の在京者同窓会は本年も去る四月十八日、東京青山ダイヤモンドホールにて開催された。金沢からも参加予定であったが、当日の国鉄ストの為め上京不能、在京者の十四名が集って懇親会を開いた。集る会員は少なかったが賑かな話題がつきず八時すぎ再会を約して散会した。



◇六桜会(一中38回)同窓会

昭和六年卒になる六桜会はこの程八月十八日蛤坂の山錦楼に於て同窓会を催した。当時の恩師鏑木勢岐、宮沢外与治の両先生を囲み三十名が集った。同会では来年が卒業五十年に当るため、その行事の打合せ等を行い、席上十名の委員を選出して計画を立てることに決した。

尚、今春の叙勲に元警察に多年勤務し、晴の叙勲に浴した堂井武雄氏に会長村中博明氏より賀表を贈呈し記念品を贈ってその労を称えた。そのあと賑かに話題が尽きず、来る五十周年大会には是非元気な顔で再会することを誓って散会した。



◇一中八桜会全国大会の集い

毎年一回、恒例として催す八桜会大会は本年は九月十四、十五日の両日関西在住者、八牧、木村氏等の地元組七名の世話により京都駅前日本館に於て、全国大会を開催した。金沢より粟野、小堀、英氏等十五名が大挙して参加、又東京地区からは長井、古田氏等五名、他に岡山より辻氏等、合せて三十名が一年振りに顔を合せた。静かな京都の風情の中での会合は一段と趣をそえ、互の健康を祝し、想いでの懐旧談に話題がつきず一夜を楽しく過した。翌十五日、次回の会合を約して散会。

◇一中四三会同窓会

昭和十一年卒の一中四三会の同窓会が去る五月二十四日に開催された。会場は犀川沿いの新橋詰「かわ新」にて、当時の恩師藤田誠一先生を囲み同期生が集った。世話人代表高辻秀時氏が司会となり、会員のその後の近況の報告があり、藤田先生の挨拶があった。祝宴は和やかな交歓かち始まり賑かに校歌の会唱、応援歌の交歓と続き盛況の中に時が過ぎ、次回の再会を約して開散となった。

◇たまに勉強研修クラス会をひらこう(一中四十六期)

昭和十四年卒の四十六回生では去る二月二十三日に「有志研修クラス会」を日本道路公団理事技師長の吉田喜市氏(現飛島建設副社長)の帰省を機に開催した。当日集った会員は約三十名、石野竜山氏の開会のことばにつゞき内田一会長の挨拶があり、吉田氏の「道づくり」と題した講演会を行った。一同その講演をき、集る者の勉強会として有意義の研修クラス会を終った。

尚、四十六期は年二回クラス会を開催しているが五十五年度は九月六日(土)卯辰山ホワイトハウスで総会を開催した。幹事は青梅、太田両氏。東京より出席した村井又兵衛氏より卒業四十周年記念文集編集方針の説明あり、なんとか明年中に上梓の運びとしたいとの熱意溢るる意見開陳があり出席者に深い感銘を与えた。

◇一中五十四回朱木会三十五周年大会

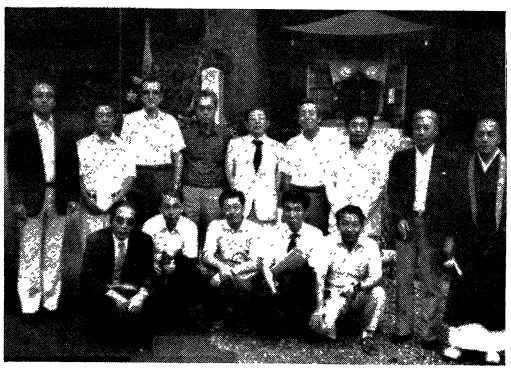
機関紙「朱木」を以て結ばれている一中五十四回生の同窓大会が、今年は卒業35周年を迎えるとあって、全国的に同期生に呼びかけ八月十六日記念大会を催した。集った同期生

八十名は、まづ母校の泉丘校を訪れ、近く改築を予定される母校の校舎、校庭、教室にと、夫々昔を懐古し、想い出にひたりカメラを向けての記念撮影をした。つゞいて犀川畔の会場「かわ新」に席を設けて総会に移った。世話人代表の坂野雄一氏の司会で最近の会員の動勢の報告があり「朱木」第三号を全員に配布した。

百五十頁に亘る朱木には会員の随想や、新聞に掲載された会員の記事等をのせて、皆に喜こばれた。祝宴も一中の校旗を飾り賑かに時の過ぎるのも忘れて盛会を呈した。

◇金沢一中55期関西同窓会

関西地区在住の一中55期生にて結成している関西五十五回同窓会が七月五・六日の両日にわたり研修会を兼ねた同窓会を比叡山延暦寺に於て催した。集った会員は、金沢、東京、九州からの十七名、初日は延暦寺の迎賓館である大書院で夕餐を共にした。翌朝は六時半からの根本中堂で勤行参加のあと、最近帰国した高橋氏の「リビア状勢」の報告、つゞいて物故同窓生などへの回向を同窓の即真師によって阿弥陀堂で厳修した。



◇一中56回泉2回同窓会

昨年卒業30周年記念大会を盛大に挙行した泉二回（一中56回）生は今年は八月十六日この程新装なったばかりの金沢シテイホテルに於て大会を開催した。集った同期生六十名に旧師の桑原、福田、任田、四日の諸先生を招き盛大に行った。司会には普神貴行氏がなり昨年の三十周年記念大会に刊行を決議した記念誌、昭和1ケタ、ある証言「羊と猿の群れから」を全員に配布した。同誌は旧師鏑木勢岐氏の「記念誌を祝って」の辞から当時の先生方のことば、同期生の想い出等をのせ過ぎし三十年前の写真が集めてある。

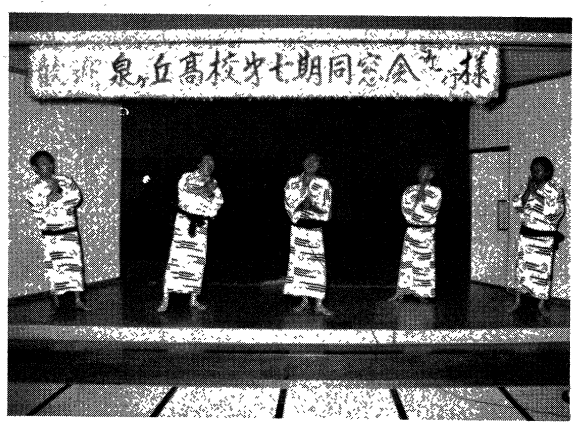
尚、この記念誌と共に記念風呂敷を各自に配った。又母校にあった旧藩主前田利為氏の扁額を更めて修複し、母校の図書館に記念として寄贈した。

◇金沢一高同窓会

昨年同期の名簿の整備を機に第一回の同窓会をもった一高同期生は、第二回同窓会として去る八月九日、会場を湯涌温泉白雲楼に於て開会した。東京より丹羽、釣谷氏、大阪よりは和田氏と三十五名の会員が集った。尚、当時の恩師松村先生を招待し、往時をしのび三十年の懐古談に花を咲かせた。今後は毎年広く会員に呼びかけ同窓大会を催すことを決めて翌朝散会した。

◇泉丘七期二十五周年全国大会

今年、卒業25周年を迎えた泉丘七期生は去る六月十四日、粟津温泉の辻のやに於て、同期の25周年全国大会を催した。当日集った会員は関東、関西はじめ遠く県外から十九名、男五十九名、女四十五名の計一〇四名、それに当時の恩師山本外吉校長他十名の教師を迎え予想以上の盛況であった。世話人水谷、高岡、諸の各氏が夫々半年前より準備したものであり、会の司会を水谷氏が行い、同期生の現況等報告のあと祝宴に移る。旧師や同期生との間に話題が尽きぬ中に応援団員のリードで歌や手拍子と賑やかに一刻を過し、最後に全員で校歌を合唱し三年後の再会を約し万才で散会した。



当日、出席の旧師は山本外吉、布山清吉、庄山隆吉、香村忠、西野哲也、竹田和雄、高橋正行、後出定美、垣田生知、松田春海、北市省三の先生方である。

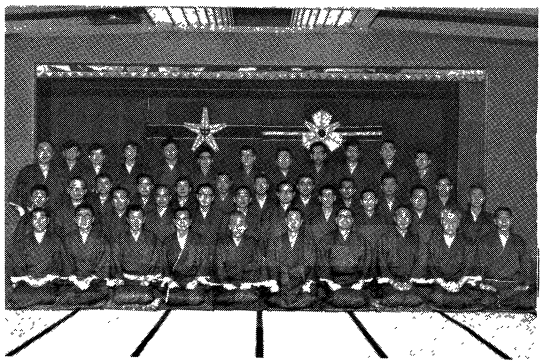
◇泉丘八期第二回同窓会

一年余の歳月をかけて、同期生の調査と、その準備にあてた泉丘八期生で、このたび第二回の大会を八月十六日、金沢駅前の都ホテルにて開催した。第一回大会より四年振りの、この同窓会には、遠く北海道より東京、大阪、京都と各方面より一三〇名の会員が参加した。旧師として山本外吉校長、香村忠、西野哲也、竹田和雄、北市省三、松川一雄、垣田生知の各先生を招き盛大な同窓大会となった。司会者を福田太睦氏がつとめ同期生の近況、一泉同窓会の最近の動き等を報告し、続いて垣田泉丘教頭より校舎の改築計画と進行状況の説明を受けた。これより祝宴に移り四年振りの再会に歓談はいつまでも尽きなかった。最後に全員による校歌、応援歌で万才三唱散会した。

尚、この会合を機に今日迄、不詳となっていた会員の大部分が判明し立派な内容のとゝのった名簿の完成が出来た。

◇北陸電力一泉会第19回大会

昭和三十年六月「北陸電力一中会」として旧金沢一中卒業生を以て結成した北陸電力同窓会は一昨年開催した第18回大会にて、この名称を「北陸電力一泉会」と改称して新発足した。今回は山代温泉「ホテル百万石」に於て第19回大会を催した。三月末現在の会員数は一中出身者は二十一名、泉丘出身者は四十名の計六十一名。当日は勤務地の関係等もあり、この内三十八名が集って盛大な一泉同窓会となった。席上で本年度退職者の送別、新入会員の紹介を兼ね、宴に移った。会場には一泉同窓会の会旗を揚げ、往年の学生時代にかえって賑やかな歓談の一時を過した。最後には一中、泉丘の校歌を肩組み合せ力一杯うたって閉会した。



1978 3 4 北陸電力㈱ 第18回一泉会 於 あわず ホテルかみや

句集〝繡眼児〟より

金森勝弥（大正四年卒）

秋菊

秋立や言づけてくる恙なさ
高原や露しとどなる野菊みち
虚しさも孤りも親し秋灯下
立ち寄りし山寺昏れて秋意満つ
叢の尾花がまねく山の荘

職場で一泉会の結成を

今や一泉同窓会の会員は各〻その職域でそれぞれ中心的な存在として活躍されて居ります。官庁、会社、其の他の事業所に勤務されている方々にて、その職場での一泉会を結成されているところが最近目立ってきました。

職場単位の一泉会を組織して、大きく母校を中心とした団結をはかり一泉同窓会を発展させることも一策かと思います。各職場での一泉会結成を期待いたします。

五十五年度会費納入のお願い

十月十五日、物故会員の慰霊祭施行と共に、本年度の総会も盛大に挙行され、一泉同窓会としての新年度が始まりました。同窓会をよりもり上げるため一昨年より各卒業期ごとに年会費として金一万円を納めていただくことに決まりました。各期におかれては、一泉同窓会の運営費の一部として、本年度も会費をお納めいたゞくようお願い申します。

同窓会通信

泉丘校舎改築いよいよ始まる

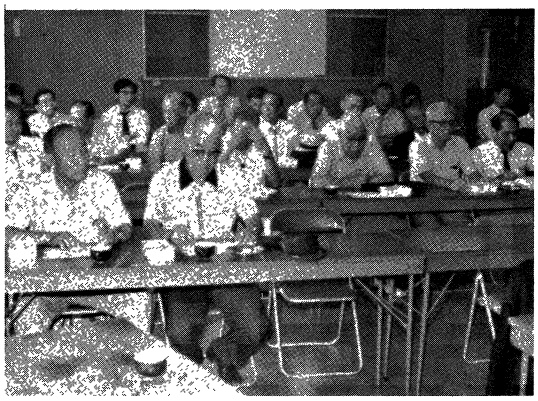
かねて計画中の泉丘校舎の全面改築も愈々軌道にのり、今八月から、その一部取壊しが始まった。四ヶ年計画の初年度として旧体育館（武道場）から工事がはじまり順次進行してゆく予定。

完成後は鉄筋四階建の県下最大の校舎となり様式には現泉丘校の歴史伝統を表徴する型式をとり入れ、画一的な学校建築を避けたものとなる設計である。

常任委員会を開く

一泉同窓会にては去る九月五日午後二時より母校の集会室に於て総会前の常任委員会を開催した。当日は常任委員の平手三郎（大正九年卒）、村山勝次郎氏（大正十三年卒）、又野政次氏（大正十四年卒）らの大正卒業期の先輩はじめ七十名の各期委員が出席した。宮会長の挨拶につゞき、大高校長より、学校の現況について細い報告があり、更に校舎全面改築について西川泉丘校事務長より、くわしく概況の説明があった。

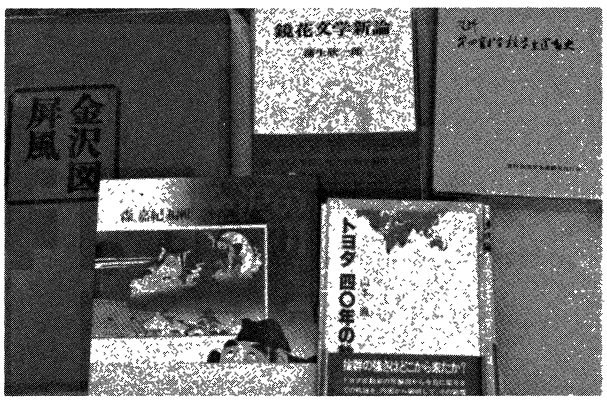
それより議事に移り、小川副会長より本年度の総会開催についての審議を行い、例年通り本校創立記念日の来る十月十五日物故会員の慰霊祭を厳霜碑前にて挙行、つゞく総会を金沢ニューグランドホテルに於て開催することを決議した。つゞく議題として五十四年度の同窓会決算を審議し、了承を得た。尚近く迎える創立九十周年記念のこと等が議題にのぼり委員会を終了した。このあと山森青硯氏（大正十五年卒）の講演が「曲りかどに立つ日本人」と題し、深い感めいを与えて午後四時散会した。（講演要旨は別項に記載）



卒業生会員よりの著書寄贈

この程、旧金沢一中卒の会員より、その著書の寄贈が相ついで、その数も二十冊余となった。その中には斉藤季夫氏（昭和四年卒）より、同氏主宰の文一総合出版社による「金沢図屏風」「金沢の引札」の図録他八点。金森勝弥氏（大正四年卒）の句集「繡眼児」。蒲生欣一郎氏（昭和二年卒）の「鏡花文学新論」。山本直一氏（大正十二年卒）の「トヨタ四〇年の軌跡」。青戸泰賢氏（昭和六年卒）の「金沢の季譜」等がある。これ等の本は、同窓後輩に広く公開し、将来にそなえて保管することゝした。

尚、今後同窓会会員の著書について大いに関心をもち、整備したいと念じている。



郷土の新聞に母校の連載記事が

郷土の名門校として、幾多の人材を輩出した、旧金沢一中、泉丘高校の歴史を綴る連載記事が、たま〳〵時を同じくして、郷土の新聞の北陸中日新聞と北国新聞に、この六月から掲載されはじめて今日なお続いている。「物語り一中、泉丘」として

巌霜碑の下で
金沢一中・泉丘高物語

物語一中泉丘

小竹武夫氏（大正十二年卒、中国文学者）が「巌霜碑の下で」と山本外吉氏（泉丘初代校長、金沢経済大学長）が、それぞれ表題の題字を書き、広く世間の話題をまいて好評を得ている。

新聞記者からみたこの一中、泉丘のたどってきた歴史と伝統には興味深いものがある。

高川義一
（一中五十三回卒）

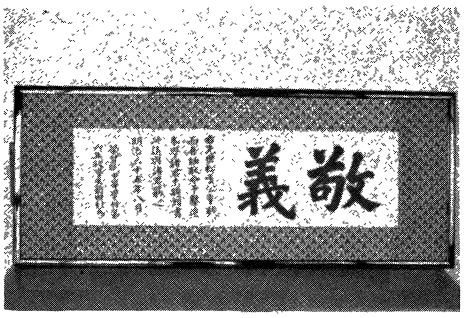
一泉剣友会

私は昭和四十五年から、縁あって母校の教壇に立ち、放課後は剣道部の顧問として、道場で部員の指導に汗を流しています。赴任して、まず先に行った所は、やはり青春の思い出の焼ついている剣道場でした。私等が生徒のとき稽古の前後に拭き掃除をして、自分の影がうつるほど磨いた道場は荒れほうだいで、見るかげもありませんでした。四十数年の風雪に耐えてきた道場も、ついに一昨年取壊され、ほゞ同じ場所に第二体育館が新築されました。その一階が道場となり、県下の高校では最大の道場として関係者から羨しがられていますが、私が誇りに思うのは道場の正面に一中時代の神棚が安置され、左右に「養浩堂」（旧第九師団長大島久直書）と「剣霊正人」（中山博道書）の扁額が掲げられていることです。このことが一中、泉丘の剣道部卒業生の大きな心のきづなとも言うべき「一泉剣友会」の結成とか、わっているので、以下その経緯について述べてみたいと思います。

時々防具をたずさえて道場を訪ねてくれる泉丘剣道部の卒業生の中から、ＯＢ会を創って母校剣道部の後援をしようという話がもち上り雄谷助成（33年卒）、金田憲忠（36年卒）、船木一璋（7年卒）、高畠菊丸（39年卒）、笠間洋（40年卒）、中川恒雄（41年卒）らが中心になり昭和五十二年二月、剣泉会と命名して発足した。名簿作成につゞき部旗の寄贈もうけまた現役、ＯＢ連合のチームをつくって白山比咩神社の奉納剣道大会に出場し、優勝するなど剣泉会の意気はすこぶる盛んなものがありました。たまたま一中時代の神棚が故吉野勝太郎先生のもとにお守りいたゞいていることを聞き是非この際、これを譲りうけたく、四井謙次先輩の口ききもあり、心よく譲りうけることが出来ました。更にこれにより旧一中剣道部ＯＢ会（養浩会）と剣泉会と合併しようということになり、地元一中ＯＢの太田真一（大14年卒）、別川七造（昭5年卒）、若林文一（昭6年卒）、岩脇他計雄（昭7年卒）、宮野宗一（昭7年卒）、大村孝一（昭8年卒）、加島武男（昭15年卒）、山崎秀夫（昭16年卒）、藤沢正清（昭19年卒）、堀敬（昭26年卒）、川北篤（昭23年卒）等の先輩の助言をうけて一泉剣友会を発足することになりました。つゞいて五十四年八月十八日、新装なった道場で第一回の総会をひらき、物故会員の追悼道場開きの神事のあと泉丘剣道部員をまじえて合同の稽古に汗を流しました。尚、これを記念し旧一中時代の道場に掲げられていた前述の扁額二面の修復と選手用剣道具七組の寄贈を行いました。ともあれ新道場の建設を機に、一泉剣友会が誕生し、道場に魂が植えつけられた意義は誠に大きいと思っています。

一中剣道部に籍をおいた一人として、泉丘剣道部の指導に当っている私としては、今後の責任の重大さに身のしまる思いがします。これから一泉剣友会を心の支えとして精進し各位のご期待に応えたいと思います。

（泉丘高校教諭）



一中五十六回（泉二回）生の卒業三十周年記念にて修復なった前田利為氏の扁額

第4回桜美会小品展ひらく

美術愛好者を以て組織する桜美会で会員有志の出品による桜美会小品展が五月八日から十三日の六日間、北国新聞社、北陸放送の後援によって開催された。このたびは会場を片町北国ビルの北陸電力金沢サービスステーションのサロンに設けた。旧師の宮沢外与治氏の作品に会員井口政雄氏他三十名の夫々個性のある作品が展示された。会場は地の利もあり連日多数の人々の来場があり盛況を呈した。とくに一泉同窓会の会員がこもごも集り和やかな談笑が毎日続いて小さな同窓会風景が毎日みられた。

次の一泉桜美会八周年記念美術展は来る十月九日より十四日の六日間片町大和デパート8Fホールにて開催予定。

水泳部OBのプールサイド同窓会

本校水泳部ＯＢの泉泳会（掛野賢一会長）は八月十五日、泉丘母校プールでプールサイド同窓会を開いた。校舎改築に伴い、近く取り壊される同プールを惜しんで最後の泳ぎ納めをしようと集った。午後から始まった同窓会には、家族連れの同部ＯＢら約六十人が参加。かってのローマオリンピック水泳、平泳ぎの銀メダリスト大崎剛彦選手も加わった。同窓会では水泳部員の集りにふさわしく数々の水中ゲームが用意され、水中宝探し、体重別、年令別のリレー二十五米のコースをどれだけ正確に一分間で泳ぐか、というタイムトライアルレースなどが行われた。リレーには、大きなスイカが使われてかっての名選手たちは、水中で悪戦苦闘、スイカを抱えてコースに飛びこみレース途中でスイカを逃がしてコースを逆戻りして追いかける者もあり参加者は大喜び、かっての厳しい練習と異なり、ＯＢたちは思う存分ゲームを楽しみプールとの別れを惜しんだ

新聞部より
『伝統の重さ』に思う

泉丘新聞部長　北　雄介

現在、新聞部では〝いずみの原〟第百三十七号発行に向けて、部員一同悪戦苦闘の毎日をすごしております。

この部では『先輩の築き上げた伝統』について考える機会が割会多く、長年にわたる多勢の先輩方の業績には、只々感服している次第です。特にこの部に所属する者達にとってその例の最たるものが〝いずみの原〟のレイアウトです。新聞の出来を大きく左右するものゆえ、〆切が刻一刻と近づく中で、再三頭を捻る事となるのですが、結局は前回の新聞とほぼ同じものに落ち着いてしまいます。以前のものが良いだけに、それ以上を狙うのはまさに至難の技。結果として「マンネリ」との声も聞かれる様になりました。ここで思い切って変えてみて『ケガの功名』でも期待したいところですが、現新聞部員はこの『一つの伝統の継承とその矯正』という問題をかかえ、躍起になっているところなのです。

在校生全体を見てみると、やはり、一番の伝統継承の場は記念祭と言えるでしょう。皆が一つにまとまり、青春の一ページを飾り合います。そこで新聞部としては『古き歴史を顧て』と題し、旧本多町校舎、及びそこでの記念祭から現在までを振り返り、今後への意見などを加えてみました。そして、その製作過程の調査で『厳霜碑は戦没者の碑ではなくて、泉丘の卒業生で亡くなった方の霊をおさめたものである。』という事、その他校内の様々な箇所に存在する彫刻などの由来を知る事ができました。

果たしてこれらの事が在校生全体に浸透しているのかどうか、多少疑問です。それら具体的な形で残されている伝統の紹介はもとより、幾多の過去の出来事から皆の泉丘への愛校心を募り、新しい泉丘を創造していく、そのはたらきの一角をなす様な**新聞部**でありたいと思っています。**今後もすばらしい新聞を作るべく努力していく**決心です。

同窓会員の消息調査に協力を！

一泉同窓会事務局にては名簿発行以来、引きつぐき会員の移動調査を実施しております。会員数も旧金沢一中、泉丘卒業生、合せて一万九千余名となりました。消息不明の方々も未だ相当数にのぼります。とくに若い方には職場の転勤等があり、女の方には結婚による改姓、住所変更があり仲々その住所をつかむのに困難です。目下明治の卒業生で新会員名簿発行後に調査判明した死亡確認者は二七五名、健在を確認した会員七十八名が判明しました。今後同窓の各位には会員名簿参照の上、移動ある方が判明次第ご連絡下さるよう重ねてお願い申します。

支部だより

関西一泉会事情

終戦後の混乱から抜け出して、所謂高度成長が始まろうとしていた昭和三十二、三年頃より母校金沢一中卒業生関西在住の諸兄より同窓会を開こうと云う声が上り、明治四十年卒故改田四郎氏、大正二年卒故田辺甲午氏等の非常な御努力の結果、とも角第一回の総会を持ったのが三十五年頃と思います。その後泉丘高校卒業生を含めた関西一泉会として四十二、三年頃迄盛大な会合が何回も続きましたが、不幸にもそれ迄献身的に御尽力された田辺氏と、引続いて山本会長が急逝されると云う事故にあって、関西一泉会は学年別の同窓会を除いて中断の状態となりました。多くの諸兄が再建の望みを持ち乍ら御世話下さる方が見い出せぬまゝ、茫再日を重ねて今日に至りましたが、先般意外にも私等数人に本部より関西は何をやっとるか、しっかりせいと激励ともおしかりとも受取れる御手紙を頂載して恐縮している次第です。

本部からの慫慂によって漸く再建へと動き出す気運になって来たと云う事自体、随分だらしない事ですが、正直言って之からの足掛りが出来た気になって非常に感謝しています。そこで早速有志十二人に御参集願って去る六月二十六日総会への打合せ会を持ちました所果せる哉皆様再建への意欲が盛んで前途に明るい希望の持てる心強い印象をうけた次第です。

十一月頃の総会へむけて更に打合せ会を開いて総会の成功を期し度いと考えています。

色々不行届な事が多いと思います。何卒本部並に会員諸兄の御鞭撻、御援助を御願い申し上げます。

高岡幸二郎（一中四十四回卒）

六月の打合せ会に出席の諸兄

玉村　文雄(42)　長岡　寛興(43)
水上　慎(43)　森沢　正夫(47)
元田　隆(47)　浅井　悦郎(55)
蜷川　俊則(泉)(2)　松本はつ江(泉)(4)
木戸上純子(泉)(4)　元地　健(泉)(13)
岡谷　雄二(泉)(19)

会員の住居地、勤務先等に変更のある際は是非ご連絡下さい。

〒921 金沢市泉野出町三―一〇―一〇
一泉同窓会事務局
西多外喜次
電話（〇七六二）㊷〇二一一

関東より一泉同窓会の発展を祈って

秋になると「一泉同窓会」はまだかとアチコチから催促の声があがる。夏休みをきめこんだ幹事がのんびりしていると追い立てられる想いで、さて会場は、費用は、誰れをお招きするか、何月、何日、何曜日を選ぶか幹事が何回も会合をもち、走り廻ることゝなる。今年も関東焼き（注どじょうの蒲焼）の手配は大丈夫か……これを食べたくて毎年会に出るよ…との有難い先輩会員の仰せ、酒は福正宗か、白山か、かぶら寿しは未だ時期が早いかな、はんぺんの煮込みなんか懐かしい料理として受けるかな。折角集っていたゞいた機会に郷里の味、一品や二品出したいと三十名の幹事が集ってワイワイ、ガヤガヤ。

漸く五十五年度関東一泉同窓会総会の大筋が決って案内状の作成、発送をはじめ、サア今年は何人集るかな、一昨年は二三〇名、昨年は二八〇名、今年は三〇〇名を超えて何人だろう。

女性の会員も年々ふえて華やかさ一入の会となるにつれ女性会員に満足いたゞける趣向も必要となる。ない智恵をしぼるのはぜいたくな悩みかも知れません。かくて関東一泉会より全国の同窓会にご案内申し上げます。私等は本年も元気に集ります。上京の機会があれば是非お寄り下さい。

（文責　北山雅義）

昭和55年度関東一泉同窓会総会
十一月七日㈮午後六時
日本青年会館（神宮外苑）
会長　鏑木政岐

あとがき

「一泉」の創刊号が今春四月に発行され、せめて年に一回刊行出来ればと思っていたところ各期の方々から早急に第二号をとの、ご要望があり、早々に原稿を送ってくる会員すら出て来た。まことに有難い激励と、感謝のきわみであります。この機関紙が少しでも皆様の交流の場となり、母校の近況と共に、各期の会員の動勢をお知らせすることが出来れば幸です。

今後、各位の益々のご支援をいたゞき、この「一泉」が長く続くことが出きるようご協力をお願い申します。尚、各期の催された同窓会等の記事にて記載の洩れたものもあることゝ思います。行事を催された期は是非同窓会本部宛にご一報をお願いします。

（事務局　西多記）